

ネパールの村落調査とカースト・システム

石 井 溥

1. はじめに

今日はネパールの村落調査の経験をもとにカースト・システムをめぐるお話をさせていただきます。

私の専門は文化人類学で、1970年から文部省のアジア諸国派遣留学生としてネパールに2年間滞在し、主に村落調査に携わりました。それ以来、77年から79年の始めまでの約2年間、その後は2,3カ月ずつ何回かという形で、ネパールでの調査をやってきました。

一番最初に調査したのは、カトマンズ盆地のカトマンズ市の郊外のS村です。次に77~9年にはネワールの村の追跡調査とともに、カトマンズからそんなに遠くないダーディン郡の「山地ヒンドゥー」のB村で調査をしました。カトマンズとボカラのほぼ中間にある村です。それから80年代の末からは、東南ネパールのジャナクプールという町から南に入った、インドとの国境へ5キロくらいのG村でも調査をしています。そこはミティラー地方というところで、ビハール州(インド)とネパールにまたがり、ヒンドゥー教をよく保持している文化圏として知られています。以上の3つが私の主な調査地です。(なお「山地ヒンドゥー(教徒)」を「パルバテ・ヒンドゥー」とも呼びます。パルバテとは「山」をあらわすパルバットの最後に「エ」をつけた形容詞形(「山の」)で、「山地の人」という名詞としても使います。)

これらの調査地には、どこにもカーストが存在しています。そのようないくつかの社会を扱って、ネパールのカースト社会の比較研究をやってきました。カースト的な慣行というのは、我々がみると非常に意外な面、何でこうなのだろうという面がありますが、そういう点に突き当たった場合、最初の経験がどうしても印象に残ります。この点では私の文化人類学の先生が「君たちフィールドワークの一番最初の一ヶ月は何でも記録しておきなさい、はじめの頃の印象はとても大切なんだ」という話をされたのを覚えています。なるほど、一番最初の頃に印象に刻まれることには、かなり重要なことが含まれていて、後で反復して考えてみても随分役にたつことがあるのです。

2. 「入っていいですか」

ネパールに行って、しばらくはカトマンズで準備をしたり、調査村の選定のためにいろいろな村を歩いたりしていました。最初に村に入ったのは今頃、ネパールでモンスーンの雨が降り出し、田植えをしている頃でした。最初はいろいろな村をまわってこの S 村に決めたわけです。二度目にそこに行って、村の書記の人に頼み込んでここに住ませて下さいと言ったら(何日後でまた交渉に来る形になりましたが)部屋を貸してくれました。

その部屋が、畳でいったら 30 畳弱でしょうか、長方形の部屋で、隅に神殿があり、部屋の真ん中を区切る柱が 2 本ある二階の部屋でした。一階の入り口に鍵は付いていますが、簡単な鍵をかけても、神殿に毎朝早く礼拝に入ってくる当番の家の女の子が壊してしまうので、結局開け放しで、四六時中人がいるという調査状態でした。

最初の 2,3 ヶ月は自炊をしていました。カースト社会ですから私のようなよそ者にはご飯を食べさせてくれないだろうと見当をつけて、自炊の支度をして行ったわけです。ネパールで「ストーブ」と呼ばれる簡単な石油コンロと、よく登山で使われる圧力式のコンロ(ラジウス)を、入り口とは反対側の部屋の隅に置きました。

ある雨の夜、私が一人で料理をしていたら、カトマンズに通いで働きに行っている村の男性が帰ってきて、初めて私の所にやって来ました。この人はネワール語でシェショ、ネパール語(かつネワール語の尊称)でシュレスタと呼ばれるカーストの人でした。この人々は、カトマンズ盆地あたりにかなりの数で住んでいて、カースト的地位も高いところに位置づけられています。

このシェショの男性が、所々にゴザが敷いてあった二階の土塗りの床に靴で入って来て、コンロの置いてある隅の柱の手前あたりで止まって、そこで「入っていいですか」と私に尋ねたのです。その頃はまだ私は、村の人々の母語のネワール語(チベット・ビルマ語系)ではなくてネパール語(インド・ヨーロッパ語系国語、共通語)で話していました。ネワールのかかりの人はネパール語も話せるのです。

それで「入っていいですか」と訊くわけです。もう入って来ているのになぜ訊くのか。私にはその意味が分かりませんでした。とまどっていたら今度は「あなたはブラーマンですか」と尋ねてきました。

ブラーマンはここにもいますし、山地ヒンドゥー教徒の中にも、タライ(ネパール南部でインドから続くガンジス平原の一部)の住民の中にもいます。ヒンドゥー教の司祭カーストです。南アジア世界では多くの所において、大体儀礼的な序列では一番高いと言われています。

それであなたはブラーマンかと訊かれて、はいと答えたら面白かったかもしれませんが、「いやブラーマンではありません」と返事をしたのです。そうしたらそこで彼は、靴を脱いで私の近くに来ました。このやりとりが、印象的だったことの代表例です。1970 年 7 月の今頃ですから、もう 27 年も前のことですが、まだ鮮明に憶えています。

ここで彼が靴を脱いだということについて考えさせられました。私はただ部屋の隅だからと
いうことで、コンロを置いていたのです。台所だという意識は全くありませんでした。ここは
私にとっては全く床の他の部分と連続した所で、高さの差があるわけでもなく、部屋の真ん中
に並ぶ柱のうちの一本があって、隅にコンロがあるだけの空間です。ところが彼にとっては柱
から壁にいたる、私には見えなかった直線が見え、それで区切られているこの空間がはっきり、
台所と認識されたのです。住人の私自身が意識していない区分線がその人には見えたのです。

そういった空間区分をはじめ、我々には見えないいろいろな区分がカースト社会にはあり、
区分線から先には別の意味が籠められるのです。ネパールとつき合っている方は、「台所」と
いえば、靴を履いて入ってはいけない、という点がすぐ念頭に浮かぶだろうと思うのですが、
「入っていいですか」といわれても、私にはその時、何が問題なのかピンと来ませんでした。彼
が靴を脱いで入ってくるまで、そこが台所で他と別扱いの空間だということが分からなかった
のです。

食べる物を用意する台所というのはネパール、インド等のカースト社会では特に清浄な空間、
穢れていない空間でなければいけない場所です。しかもそれがカーストの上下と関わります。

シェショの男性が手前で止まって「あなたはブラーマンですか」と尋ねたのは、ブラーマン
の人の台所だと、他のどのカーストの人にも入れないからです。ブラーマンはシェショなどより
カースト階梯では上で、その体から住んでいる家まで、他の人より清浄であり、清浄に保たな
ければならないとされています。中でも台所は一番清浄でなければならず、そこに他のカース
トの人が入ると、他の人は穢れの程度がブラーマンより高く、しかも穢れというのはうつと
考えられているので、台所が穢れてしまうことになり、それで、そのような行為は念入りに避
けられるのです。

フランスのルイ・デュモンの『階層的人間』というカースト論で強調されるのが、浄—不浄
という観念です。儀礼的な穢れと清浄という観念の二つが相対して関係しあっている。この対
立においてカーストが序列づけられている。いろいろなカーストが、清浄なカーストから穢れ
たカーストまで並ぶ、という考え方で整理をしたわけです。様々な批判はありますが、かなり
当てはまる考え方だと思います。

穢れの観念は日本人には実は分かる感じもあります。穢れがうつというのは今の日本でも
言い、葬式などの後、塩や水で清めて家に戻る慣習があります。それは死者の死の穢れとい
うのが日本の中にも観念としてあって、参加者にうつと考える。うつから清める、それを塩
や水で行う。カースト社会の穢れもいわば伝染性です。その伝染は接触によってだけではなく
接近によってもうつと考えられています(この点も似ています)。

それはともかく、私がブラーマンではないと答えたことで、彼は私の台所に入ってくられた
ことになります。「入っていいですか」というだけの質問の中にいろいろなことが籠められて
いる、そういう経験がありました。

3. 「あなたのジャートは？」

もう少し経験を基にして考えてみます。

村の生活の中で「あなたのジャートはなんですか」と聞かれることがありました。「ジャート」というネパール語は、「カースト」と訳すことも「民族」と訳すこともできます。最初は、そう訊かれても困ってしまいましたが、だんだん「ジャパニ」と答えれば、相手が一応納得したような顔をすることがわかってきました。「ジャパニ」は「日本人」で、これがカースト名になるのか民族名かそのへんはごちゃごちゃですが、何しろそう答えると何となく相手はそうかという感じになる。それはどういうことかという点は、やはり気になりました。

私は「カースト」すなわち個々のカーストを、「他のカーストとの関係において上下に序列つけられた世襲的身分範疇」と定義します。個々のカーストには名称があります。これは社会的なカテゴリー(範疇)です。グループというほどまとまっていなくてよく、また、一緒に何か仕事などをしなくてもいいという意味で範疇という言葉を使っています。境界に漠然としたところがあるという面もあります。それに名前がついている。ネパールとかインドの人々は人を見るとどれか名前の付いた社会範疇、ネパールでいえば「ジャート」にその人が属していると考えたがる面があるようです。もちろん我々にも姓があつて名前があるのですが、それとは別に大きくひっくりめて、たとえば私が石井だとすると、石井というのは何というジャートに属するのが気になる。私は「ジャパニ」と答えるようにしたのですが、そうすると「ジャパニ」という名前を持った社会カテゴリーに属しているのだとわかる。それでなんとなく相手は安心するのです。誰でも名前をもった何らかの社会範疇のどこか一つに属しているはずだという観念があるのです。面と向かってでは具合が悪ければ、第三者にあの人はどういうジャートに属しているのかと聞くこともあります。何か名前が返ってこないと安心しない、位置づけができないのです。それで「ジャパニ」というような、どこかできいた社会範疇らしい名称をきくと当座は納得してくれる訳です。

しかし今度は、さて「ジャパニ」は自分より上なのか下なのかが気になってきます。ここにいる「ジャパニ」と呼ばれる人間は自分より上なのか下なのか、先ほどの男性は高位カーストのシェジョですから、私(石井—ジャパニ)がブラーマンでなければ、自分と同等か下だろうと考えて私の台所に入れる、そういうことになる訳です。

さて、この名前というのが実はネパールでは非常に複雑で、いろいろなカーストの名前があつて、しかもそれは言語と関係しますから、カースト名が言語圏ごとに異なります。ネパールの中でも、大きく分けて、3つくらいのカースト社会圏があります。私の調査したのは、ネワールと山地ヒンドゥー、それから南東部のミティラー文化圏のマイティリー語を話す人々です。そういう人々が、それぞれ異なる言葉をもっていて、その社会の中に様々なカーストを含み、それぞれのカーストが、その言葉による名前をもっているということになります。

4. ネパールの言語と民族

ここで、ネパールの言語と民族とカーストを、私なりに大雑把に概観してみたいと思います。ネパールに関しては言語系統からみるのが結構便利ですので、ここでもその方式で説明します。

ネパールは言語的には、インド・ヨーロッパの系統と、東アジア・中央アジアにつながっていくチベット・ビルマ語系との接点にあたります。インド・ヨーロッパ(印欧)語系の言葉は、ネパールの西と南から全国的に広がる勢いをみせています。チベット・ビルマ語系の言葉は東と北を中心にして、しかも、主に高度の高いところ(1200メートル以上)に分布しています。そこで、ちょっと乱暴ですが、ほぼ横位置の長方形の形をしているネパールの北西隅から南東隅にかけて、南に少々たわんだ対角線を引いてみます。すると(北を上として)左下が印欧語系の言葉を話す人々のもとの世界、右上がチベット・ビルマ語系の人々の世界ということになります。一方の言葉は系統的にはヨーロッパまでつながります。他方は、シナ・チベット語系をたててその中に入れられることもありますから、分類の仕方によっては、中国あたりまでつながるということにもなります。

この2大グループは、長方形の上辺(北)と下辺(南)に東西にのびる細いベルトを設けることで、それぞれ、さらに2つに分けられます。北のマージナルなグループはチベット語そのものを話す高地の人々(チベット人)、南のベルトのマージナルなグループは北インド系諸方言を話す人々です。それ以外の中間の山地地帯の住民が最もネパール人らしい人々ですが、その人々も言語的には印欧語系のネパール語を母語とする人々と、チベット・ビルマ語系のいろいろな民族語をもつグループの2系統に分けられます。

ここで表1を見ますと、上の方から、高地のチベット系の人々、山地高部のチベット・ビルマ系の諸民族、カトマンズ盆地のネワールの人々、主に山地の低部に住みネパール語を母語とする山地ヒンドゥーの人々、そして南部平地(タライ)のインド的な人々、と分けてあります。(ネワールはチベット・ビルマ語系の山地諸民族に入るもののネパールで唯一都市文明をもってきたため、ここでは別枠にしました。)そして、それぞれについて、生業、民族、宗教、食文化の簡単な説明がしてあります。カトマンズ盆地、山地低部、タライのあたりは稲作中心、高地および山地高部は雑穀、麦類が中心の農業で、また、高い方に行くと牧畜、家畜の飼育の比率が高くなっています。ごく高い方はチベットの世界で宗教もチベット仏教、南はヒンドゥー世界。農牧業や宗教が変わると食べ物も変わり、それがかなり高度と関係をもっています。ネパールはそんな具合に規則性のある多様性をもったところですが、なお表1の左端の番号で、ローマ数字のIは印欧語系、IIはチベット・ビルマ語系を表しています。

ネパールの住民で一番代表的なのはネパール語を母語とする人々(「山地ヒンドゥー」)です。この人々は、政治・軍勢力をもって、どんどん東に進んでいきました。一応、現在の言語人口で見ると、このグループはネパールの全人口のほぼ半数ということになっています。

東部から中部の山地を中心にし、部分的には西部にも分布する形で、チベット・ビルマ語系

表 1. ネパールの高度、生業、文化

	地 域 (高 度)	生 業		民 族 (言 語)	宗 教 (カースト)	食 文 化
		農 業	他			
II-2	高 地 (チベット高原) (3000～5000 m)	大麦、小麦 ダッタンソバ ナタネ、カブラ ジャガイモ 等	ヤク、ゾ ヒツジ、ヤギ 等 交易 (農牧商複合)	ボテ (チベット人) シェルパ	チベット仏教 (ラマ教) ボン教	ツァンパ(大麦、ソバ) (近年) ジャガイモ トウモロコシ、ジャクパ 乳製品、干肉、酒
II-1	山 地 高 部 (1200～) (1800～3000 m)	シコクビエ トウモロコシ 大麦、小麦、ソバ アマランサス ナタネ 等 (ヒマラヤの雑穀地帯)	ヒツジ、ヤギ 牛(移牧も行う) 水牛、鶏 (東部) 豚	マガル グルン タマン ライ リンブー 等	土着信仰 (北)チベット仏教 (南)ヒンドゥー教の影 響が及ぶ	トウモロコシやシコクビエ 等のデロ(おねり) ロティ(パン) 米飯、ダル(豆汁) 乳製品(近年減少) 肉(時々)、酒
II-1'	カトマンズ盆地 (1300 m)	稲、小麦 ジャガイモ ソラマメ カラシナ 等	都市(首都) 商業、工芸、織物 (牧畜のウエイトは 低い) 水牛・羊 等	ネワール (パルパテ・ ヒンドゥー、タマン 等も)	仏教 ヒンドゥー教 土着信仰 (ネワール： カースト存在)	米飯、豆汁、タルカリ 共同宴会多し(チューラ、 肉、野菜、酒) 乳製品の使用は少ない
I-1	山 地 低 部 (400～1800 m)	稲 トウモロコシ カラシナ サトウキビ 大豆 等	牛 水牛 ヤギ 鶏	パルパテ・ ヒンドゥー 他(ネワール、 マガル等)	ヒンドゥー教 (パルパテ・ ヒンドゥー： カースト存在)	豆汁-米飯(ダル・ パート)、タルカリ 高位カースト：ヤギ 魚以外の肉食・飲酒制限 乳製品の重要性高し
I-2	タ ラ イ (200 m 前後) 内 タ ラ イ (300～600 m)	稲(二期作も) ジュート サトウキビ カラシナ 等	(畜)水牛、牛 等 (工)マツチ ジュート、綿、織物 ナイロン、プラスチック 金属器 等	インド系住民 タルー 他(山地高・低部から 下りて来た人々)	ヒンドゥー教 土着信仰 他(イスラム教) (インド系住民： カースト存在)	米飯、チャパティー (無発酵パン)、タルカリ 禁酒、菜食主義者存在 乳製品の重要性高し カースト間の差大

のいろいろな言葉話す民族が住んでいます。リンブー、ライ、タマンとかネワール、グルン、マガルという民族がそれで、言語人口は、表2にリストアップしてあります。どれも、言語人口100万人以下で、(表には名前のあがっていないグループを含め)1万人以下という例も少なくありません。

ネパールの中で、ネパール語の次に言語人口が多いのは、タライ、つまりガンジス平原の続きの、海拔100メートル弱から200メートルくらいの所に住んでいるインド人と同じような人々です。言葉でいうとマイティリー、ボジュプリー、アワディーという言語の話者です。マイティリー語はネパール語に次いで第2番目に言語人口が多く、約220万人(1991年)、次がボジュプリー語(約140万人)という風に、一番南のタライの言葉がかなり上位にならび、全部合わせるとネパールの言語人口の1/5強はこれらの言語で占められることになります。全人口の半分がネパール語ですから、合わせて、印欧語系の言葉話している人が7割強を占めている、それがネパールなのです。

私は、ネパールというとても固定観念で捉えられる傾向が強いと思っています。その第一番目は「貧困」で、新聞種になりやすい。一方、政治の話は、よほど大変動でも起こらないと新聞にのりません。次はヒマラヤです。これは仕方ない面もありますが、ヒマラヤと関係ないネパール人は非常に多いのです。3番目は、ネパールをチベット系と考える固定観念。これも日本では結構強いのですが、今お話ししたように、ネパール語を含めた印欧語系の人々が圧倒的多数を占める世界だということは注意しておいてよいと思います。母語人口がそのまま民族人口になるわけではありませんが、概略のイメージを描いても、従来の観念とは大分ちがうといつてよいと思います。

チベット・ビルマ系の言葉話すいろいろな民族は、ネパール語を母語とする山地ヒンドゥーとならんで、いかにもネパールらしい、畑作に強く依存する山地の人々です(ただネワールなど一部は例外で水田稲作中心です)。この人達の言語人口は、合計してもネパールの人口の1/5ほどです。その中にチベット系プロパーも入ります。チベット系には、ネパール国内のチベット人の他、シェルパの人々も一分派として含まれます。シェルパ語はチベット語の一方言です。そのチベット語とシェルパ(表では「ボテ・シェルパ」)の言語人口は1991年で12万人くらいしかいません。これは全人口の0.66%のみです。

1991年には、国勢調査としては初めてのことで、どの言葉話しているかというのとは別に、どの「民族」に属しているかという調査もしています。すると、たとえばマガルに属しているけれどマガル語話していないというケースもでてきます。表2の一番右に〈「民族」人口1991〉として出していますが、極端なのは、グルンとかマガルです。マガルは約134万人で、言語人口に3倍くらい掛けないとマガル人口が出てこないという計算です。いい換えれば、マガルと自称する人々のうち、母語話している人は約1/3しかいないということです。あなたの「ジャート」は何ですかと聞くのでしょから、揺れは出るでしょうが、グルンだと、母語人口の倍くらいの人口が「民族」人口とされています。ここでも従来のイメージにかなり

表 2. 母語人口の推移と「民族」人口

言 語 名	母 語 人 口						「民族」人口 1991
	1952/54	1961	1971	1981	1991	%(1991)	
ネパール語	4,013,567	4,796,528	6,060,758	8,767,361	9,302,880	50.31	(α) 7,450,088
マイティリー語	1,024,780	1,130,401	1,327,242	1,668,309	2,191,900	11.85	β_1
ボジュプリー語	477,281	577,357	806,480	1,142,805	1,379,717	7.46	β_2
タマン語	494,745	518,812	555,056	522,416	904,456	4.89	1,018,252
アワディー語	328,408	447,090	316,950	234,343	374,638	2.03	β_3
タルー語	359,594	406,907	495,881	545,685	993,388	5.37	1,194,224
ネワール語	383,184	377,727	454,979	448,746	690,007	3.73	1,041,090
マガル語	273,780	254,675	288,383	212,681	430,264	2.33	1,339,308
ライ諸語	236,049	239,749	232,264	221,353	439,312	2.38	525,551
グルン語	162,192	157,778	171,609	174,464	227,918	1.23	449,189
リンブー語	145,511	138,705	170,787	129,234	254,022	1.37	297,186
ボテ・シェルバ語	70,132	84,229	79,218	73,589	121,819	0.66	122,821
ラジバンシ語	35,543	55,803	55,124	59,383	85,558	0.46	82,177
サタール語	16,751	18,840	20,660	22,403	25,302	0.14	—
ダヌワール語	9,138	11,624	9,959	13,522	23,721	0.13	50,754
スヌワール語	17,299	13,362	20,380	10,650	—	—	—
チェパン語	14,261	9,247	—	—	25,097	0.14	36,656
タミ語	10,240	9,046	—	—	14,400	0.08	19,103
タカリー語	3,307	4,134	—	5,289	7,113	0.04	13,731
ジレル語	2,721	2,757	—	—	4,229	0.02	4,889
レプチャ語	—	1,272	—	—	—	—	4,826
その他	178,142	156,953	490,253	770,606	995,356	5.38	316,706
総人口	8,256,625	9,412,996	11,555,983	15,022,839	18,491,097	100.00	18,491,097

注： 1) α = ブラーマン(山地) + チェットリ + タクリ + サンニャーシ + ダマイ + カミ + サルキ + ガイネ

2) $\beta_1 + \beta_2 + \beta_3$ = タライ諸カーストの「民族」人口 = 4,524,546 人

3) マイティリー語 + ボジュプリー語 + アワディー語 = 3,045,457 人 (1981 年)
= 3,946,255 人 (1991 年)

参照文献：

Karan, P.P. & Ishii, H. 1996 *Nepal: A Himalayan Kingdom in Transition*. United Nations Univ. Press, Tokyo, p.326.

Central Bureau of Statistics (National Planning commission Secretariat, Government of Nepal) 1993 *Population Census — 1991: Social Characteristic Tables* Vol. 1, Pt. VII.

修正をかける必要があるということになります。

いずれにせよ統計上は、ネパール語を母語とする人達がほぼ半分で、次がインド的な人々、チベット・ビルマ語系の人々はまとめても 3 番目で、チベット系プロパーはごく少ない。けれど日本のイメージだとネパールというとチベットという連想がかなり強い。無理もない面もあって、この頃カトマンズへ行きますと、難民などのチベット人やチベット寺院(ゴンパ)がどんどん増えています。しかしあれは 1959 年のチベット動乱以来の難民流入の影響が強いのです。チベット仏教は、旗を立てたりして外見的に目立つところがあって、ネパールに固有のも

のと誤解されがちです。カトマンズ盆地にはネワールの人々のネワール仏教というのが昔からありますが、それが仏教ということで、実はインド直伝なのですが、チベット系とされたり、さらには、チベット・ビルマ語系の人々もチベット系そのものと誤解されたりします。ネパールの全体像は、チベットの側面をあまり強調されると歪んでしまいます。

今日のテーマに引きつけていえば、ネパールの中には結構カーストを持っている人口の比率が多いわけです。後にお話ししますように、ネパール全体というのは19世紀にはカースト・システムでまとめられたという歴史ももっています。ただ、それで一枚岩のカースト社会になったわけではなくて、複数のカースト社会を考える必要があります。

5. ネパールの3つのカースト社会

カーストをもつ人々としては、まず、山地ヒンドゥーがあげられます。次はタライの住民で、この人々はガンジス平原のインド人と同じ諸カーストに分かれます。それから不思議なことにチベット・ビルマ語系の言葉であるネワール語を話すネワールの人々もカースト・システムをもってきました。

山地ヒンドゥーはネパール語を話すネパールのマジョリティーで、支配者側の人々です。そのカースト・システムで、バフン(ブラーマン=ヒンドゥー教司祭カースト)とチュトリ(軍人・官吏カースト)の2つで上層カーストは大体済んでしまいます。(なお、司祭カーストや職能カーストでも同様ですが、「カースト的職業」は必ずしも、そのカーストの人々が実際に携わっている職業と一致するとは限りません。) 職能カーストには、カミ(鍛冶屋)、サルキ(皮革職人)、ダマイ(仕立屋)、ガイネ(音楽師)などがありますが、これらのカーストは不可触とされてきました。両者の中間には、マトワリ(「飲酒する」)・チュトリとか解放奴隷とかが位置づけられますが、それらは別として、インドならば真ん中に沢山出てくる職人カーストはほとんどいません。そんな風が中間が大幅に欠落しているのがネパールの山地ヒンドゥー教徒のカースト社会の特徴です。

ネワールの人々は、昔からインド文明の影響を受け、カトマンズ盆地で小さな都市文明を築き、カースト制を取り入れました。この人々の中には沢山のカーストがあるのですが、そのカースト名称は、ネワール語(チベット・ビルマ語系)、ネパール語(印欧語系)、場合によっては、さらに古典語のサンスクリット語も加えて、二重・三重になっています。たとえばブラーマン(もともとサンスクリット語でのいい方ですがネパール語でも使われます)のことをネワール語ではバルム、ネパール語ではバフンといいます。「バジュラチャリア」これはネパール語またはサンスクリット語で密教系の仏教司祭のことですが、ネワール語ではグバジュと言います。ネワール社会にはヒンドゥー教、仏教が併存していて、司祭カーストとして、上の2つが並んでいるということにも注意しておきたいと思います。他にもはっきりと、ヒンドゥー教徒あるいは仏教徒とされるカーストもありますが、ヒンドゥーの神々も仏様も両方礼拝して区別のつかないカーストも少なくありません。

ネワールの中で人口が一番多いのは農民カーストで、ネワール語ではジャブ(「仕事をする人」)ですが、ネパール語的ないい方ではマハルジャンです。言葉は使っている内に蔑称的な雰囲気を持つこともあります。「ジャブ」もそうで、それをさけるのにネパール語あるいはサンスクリット語的ないい方を使うことも多くなっています。同様に、先ほどの「シェショ」をシュレスタというのもよく聞きます。この人々は、官吏とか商人のカーストといわれることもあります。カースト的職業はそれほど明確ではなく、実際の仕事も様々です(これはジャブでも同じです)。

ネワールの間にはいろいろな職業カーストがあります。ネワールの言語人口は約 70 万、民族人口は 100 万くらいだと思います。その中に数十のカーストがあります。くわしくは『もっと知りたいネパール』の表(石井溥(編)、弘文堂、1986、141 頁)を見て頂きたいと思います。ネワールの場合にはヒンドゥー教徒も仏教徒もいて、両方ともカースト制度に組み込まれています。はっきりした仏教徒は高位のいくつかのカーストとしてあり、また人口も多いことが特徴です。一方、底辺には清掃カーストなどもみられます。

もう一つ、タライの北インド系のヒンドゥー教徒の諸カーストの存在も指摘しておかなければなりません。これらのカーストはビハール州、ウッタル・プラデーシュ州その他、北インド一帯に広くみられるものと共通です。ただ、後にも触れますように、インドでとられているような、下層の諸カーストに対する優遇策(「留保政策」)が、ネパールでは実施されていないこともあり、ネパールと北インドではかなりの相異もみられるようになっています。わたしの関心からいえば、ネパールの、いってみれば周辺的なカースト・システムをみるためのコントロール・グループとして、ブラーマンや、種々の職業/サービス・カーストを揃えた、タライのカースト・システムのあり方を把握しておく必要があるということになります。私が実際に調査したのはネパールの南部東のミティラー文化圏で、人々はマイティリー語を話します。ヒンディー語が第二言語で、ネパール語は徐々に学校や官庁を中心にした共通語として広まりつつあるところです。

ついでですが、ネパールの国勢調査にはヒンディー語というのは出てきません。ネパールの中にヒンディー語があるというのを公式に認めると、それに公用語の位置を認めよという運動がすぐ起こる。それへの警戒が主な理由のようです。

いずれにせよ、カースト社会といってもネパールには、山地ヒンドゥー、ネワール、北インド的ヒンドゥー教徒の三様のカースト社会があるわけです。言葉も、それぞれ、ネパール語、ネワール語、マイティリー語という具合に違い、従ってカースト名も異なるわけですが、それだけではなくて社会関係のありかたにも異なったところがみられます。

6. ネパールの近世史とカーストの法制化

西暦紀元後くらいの時期から 18 世紀中葉まで、ネパールというところは、大体カトマンズ盆地を中心に、その周辺で小さい政治的まとまりをつくっていたと考えられます。そこへ今

の王様の先祖がでてきて、18世紀にネパールを統一して、ある時期には今のネパールの倍くらいまで大きくなりました。ところが、その膨張を快く思わない勢力が南隣りにいました。イギリスの植民地勢力です。1814～16年、ネパールと英植民地軍との戦争があり、乱暴に言えば四分六あるいは七三くらいかと思いますが、ネパールが負けて条件降伏しました。でもネパールは善戦し、無条件降伏はしなかったのです。もし無条件降伏していたら、インドになっていたはずです。そのころ、英植民地と戦ったシークやマラータの勢力は負けて、その領土は今ではインドの主要部分になっています。ネパールは小さくなくても領土は一応保ち、現在まで独立国です。

今のネパールの王朝(シャハ王朝)のはじめは一応1769年とされています。その前の中世の何百年かはネワールのマッラ王朝、古代(4～5世紀から9世紀)はリッチャヴィ王朝時代とされています。

19世紀の半ばから20世紀の半ばまでは、王様をさしおいて宰相が権力を持っていました。ラナー族の宰相が実権を握っていたのが19世紀の半ば頃から20世紀の半ば1951年をはじめまで、その間にカースト・システムを使った統治がなされました。支配者は、ネパールの中にいる人は大体みなカースト的秩序の中に位置づけようと考えたのです。支配者の出身は山地ヒンドゥーで、その中のチェトリ、チェトリの中のタクリに王族が属すということになります。

王は、ブラーマン(バフン)などをアドバイザーに雇って統治をするわけですが、その時に古典の実利論やマヌ法典にあるようなカースト的な秩序でまとめようとしていました。ネパールのいろんなジャートをどこかに位置づけなければならない。その際、自分たちのカースト階梯においては、真ん中の諸カーストがごそと欠落している、というところを利用しました。そしてそこに被征服のいろいろなジャートを位置づけようということになったのです。

18世紀、山地ヒンドゥーを中核とした勢力が。それまでカトマンズ盆地で根を張っていたネワールの人々の都市を攻める長期の戦争をして、その間に東西の地域も征服して、それでネパールという国を作っていきます。その本拠地がゴルカという、カトマンズから100キロくらい西の所です。ゴルカは英語では「グルカ」となります。それに定冠詞をつけてザ・グルカーズと呼ばれたのが、近代ネパール形成の核になった軍事政治勢力です。このザ・グルカーズ(グルカ勢力)が誤解されて「グルカ族」とされることがありますが、これは民族ではなくて、いろいろな民族を傘下に組み込んでいった軍事政治勢力です。

このグルカ(ゴルカ)勢力のネパール統一の途上、今の王様の先祖が率いる勢力に征服され降伏して、だんだんその勢力の中に組み込まれていった諸民族がいます。中西部ネパールのマガルだとかグルンだとかの人々がそうですが、この人々がグルカ勢力の中の実戦部隊を形成し、下士官だとか兵隊として活躍しました。現在では軍や警察の高官になっている人もいます。少し後では東部のライとかリンブーとかのチベット・ビルマ系の民族の人々も組み込まれ、やはり兵隊、下士官などとして働きました。そういう要素をひっくるめた勢力、いい換えれば、山地ヒンドゥーの軍事的カーストを核にしてグルン、マガル、ライ、リンブーなどの山地諸民族

を組み入れた、その全体がグルカなのです。

さて、長く続いた戦争が落ち着いて、国家的な秩序を構築しようとした時に、山地のチベット・ビルマ系諸民族をカースト・システムの中のどこかに位置づけようとしたわけですが、この中に国家形成の過程で貢献度の高いグループもあって、むげな扱いはできなかったと考えられます。インドではトライブ(部族)と呼ばれる人々は最下層に入れられたのですが、ネパールでは、空いている真ん中に入れ、それが法律に書かれます。山地の民族の中にもある程度ランク差がつけられ、政権に軍事的に協力したマガル、グルン、ライ、リンブー等は割と高く、シェルパとかボテはそれより低い所に置かれました。後者の人々はチベット系の人々ですが、彼らはネパールでは下に見られ蔑視されてきました。「ボテ」という言葉は相手に向かっていうにはあまり良くないとされています。

ネワールも言語的にはチベット・ビルマ系で、しかも被征服者なので、ほとんどは中間の位置に入られます。しかしネワール社会の中には何十ものカーストがあります。その中で不可触カーストは、山地ヒンドゥーの不可触カーストよりもっと下に入れられました。ネワールはある程度分断されて組み入れられたのです。

タライの北インド系ヒンドゥー教徒の諸カーストはこのシステムにはうまく組み入れられていません。ネパールの支配者にとっては、タライというのはインドに近く、扱うのが難しい。文明的には引け目や劣等感を感じる。そういう人々と同じ相手がタライに住んでいるわけです。一方、ネパールの国内では、タライは唯一の平らな土地で、ネパールの穀倉として無視できない地域です。しかし、ここに住んでいる人をあまり重要視すると自分たち支配層の立場がなくなる。自分たちより文明的に高いインドと繋がっている。そういう人達です。その場所は重要だが、住人にはあまり目立ってもらいたくない。非常に微妙なところなのです。それでこの人達とネパール全体のカーストのことを考えた時に、この19世紀の法律では、あまりきちんと組み入れようとしなかったのだと思います。今でも山地とタライの北インド系諸カーストは並立・拮抗している形です。

ネワールも一応は組み入れたわけですが、ネワールはネワールで自分たちのカースト・システムは別にあるのだという感じが強かったと思います。大雑把には、山地ヒンドゥー、ネワール、およびタライのインド系ヒンドゥー教徒のカースト・システムがそれぞれあって、山地ヒンドゥーのカーストの中に山地のいろいろな民族が緩やかな形で取り込まれた形といえます。しかし、山地のチベット・ビルマ系の人々は元々はカースト・システムをもっていなかった人々ですから、カースト的な慣行をきつく守って生活しているわけではありません。ただ、こうして組み込まれることにより、一部の人は牛肉を食べなくなる、などということが起こります。ヒンドゥー教徒の慣行を真似て高いカーストの方に接近していく人々もいます。そんな具合に、ネパールは全体としてカースト化、ヒンドゥー化の方向に向かってきたといえます。

現在のネパールでは、1962年の憲法でも1990年の憲法でもカーストによる差別は禁止されています。ただ微妙なのは、カーストを廃止するとは書かれていないことで、確かに、カース

トの相異にもとづく不平等や差別への反発は強まっていますが、実際の生活の中でカースト的な慣行が完全になくなっていくかというと、そうともいいきれません。

7. 今日のカースト的慣行

7. 1. 食物授受・共食規制

カースト慣行は食事に関わることだといわれることもありますが、今日のネパールでも、カーストと食事との関連はまだ相当気になります。食事はカースト間を区分する重要な行動になっているのです。

ネワールの村での話にまたちょっと戻りますが、自炊をやめてシェシヨ・カーストのある家で食べさせてもらうことになりました。ネワールのカーストは何十もあるのですが、各々の村を見ればその全部が揃っている訳ではなくて、S村には8カーストあり、その上から2番目がシェシヨで、3番目がジャブという農民カーストです。世帯数は1970年にはシェシヨ63世帯、ジャブ100世帯、1978年にはシェシヨ68世帯、ジャブ116世帯、こんな数です。他のカーストは十何世帯とか、数世帯とか1世帯とかで、ずっと少なくなります。そういう村のシェシヨの家の奥さんが「あなたにこの家でご飯を食べさせるのは良いけれど、ジャブの所でご飯を食べてきてはいけません。」と、私に釘をさすのです。

私はそれまでにカースト関連の本を読んだりしていたのですが、この奥さんのいうことが分かりませんでした。本の知識から考えると、下のカーストの人のご飯を上のカーストの人がもらって食べるのは、穢れるからだめだけれど、上のカーストの人が下のカーストの人にご飯を食べさせるのは良いはずなのです。たとえば(最上位の)ブラーマンはどこへ行っても料理人になれるといわれます。私がジャブの人の所でご飯を食べてくると、私はジャブと同じ穢れをもった人になる。でも上位のカーストであるシェシヨの人からご飯をもらって食べることはできるはず。しかし奥さんはジャブの所でご飯を食べてきてはだめだという。これが分からなかったのです。

それで私は理屈を言いました。「私がジャブと同じ(穢れの程度)になってもあなたの方が高いカーストなのだから、私にご飯を食べさせることはできるのではないですか。」すると奥さんは「あなたがジャブの所でご飯を食べてくるのはいいけれど、そうすると私はあなたの食べ終わったお皿を洗えなくなります。だからジャブの所でご飯を食べないようにしてください。」もし私がジャブの所でご飯を食べてくると、その(シェシヨからみて下の)カーストと同じ穢れになる。その人間が食べたお皿にシェシヨの奥さんは(穢れるから)もう触れない、だから食べてくるといなのです。なるほど、さすがカースト社会だと思いました。

高いカーストの人は低いカーストの人からご飯をもらって食べない。これはカースト社会どこにでもあります。その場合、水で炊いたご飯とそれ以外、たとえばチャーハンや蒸して作ったおこわの様なものは、別扱いになります。

食物のカテゴリーは、大きく3つあると考えています。ご飯と豆汁(ダル)のコンビが第1番

目で、食事規制の面では一番きついカテゴリーです。つまり、カースト・ランクがひとつでも低い下のカーストからは受け取って食べられない。第2カテゴリーはいろいろな料理した食べ物と水、第3カテゴリーは生(なま)ものです。生ものは大体どのカーストからももらって食べられます。そうしないと低いカーストの小作人から上がってきた穀物を上のカーストが食べられないというようなことが起こります。その辺はうまくできているのです。

そうすると第2カテゴリーには、たとえばチャーハン、パン、クッキー、砂糖、コーヒー、紅茶そんな物が沢山入ります。この第2カテゴリーは扱いが緩くて、たとえばこの村のシェショの人でも、ジャブやその他いくつかの下のカーストの人から受け取って食べられます。ネワール語の表現で、「水が流通しないカースト」というのがあります。これは、ある程度穢れの程度が高いカーストで、不可触かどうかを区別する線より少し上にこの水を受け取れない線があって、それ以下の人はかなり不浄であると考えられています。ここで、水が生ものではなく、第2カテゴリーで、特別扱いされているのにも注意しておきたいと思います。

この〈水の線〉より上のカーストは、それより下のカーストからは、第2カテゴリーの食物も食べられません。この社会では、もらって食べるということと、同じ列に座って食べることは同等です。そこで食物の授受と同様に、宴会などで同席してものを食べるということも問題になることになります。ですから、特にネワールの人々の宴会では、水で炊いたご飯は出てきません。これは第一カテゴリーで、ひとつでもカースト・ランクがちがうと同席できないからです。それでかわりに、第2カテゴリーの焼き米やピラフ(プラウ)を出し、いろいろなカーストの人を招くわけです。

こうして食物のカテゴリーの区別に従い、もらって食べてはだめとか、同席して食べられないとかいう規制があるわけです。ただ、規制が杓子定規に守られるかどうかは社会によって随分異なります。山地ヒンドゥーの村で調査した時のことですが、村のはずれにカミ(鍛冶屋)の集落がありました。そのカミ(鍛冶屋)の所に行ってお飯を食べてはだめなのですねとブラーマンに尋ねたら、いや、だめだといわれるけれど、実際にはこっそり行って食べているブラーマンもいる。友達になると誘われることがあって、それで食べてきたと判っても、他の人はあえて騒がないのだということでした。

そういうのを見るとネワールは割ときついけれども、山地ヒンドゥーは食事に関しては柔軟性があるという気がしました。ネパール全体の政治制度は山地ヒンドゥー主導型で作られたわけですが、統治には柔軟性が欠かせない、また、柔軟性があったからこそ統治に成功した、ということもあるような気がします。

7.2. カースト的職業

他の面に目を向けますと、カーストによる職業の分業というのがあります。カースト的職業にはいろいろありますが、このごろ随分これが無くなってきている傾向があります。

その中で割合残っているカースト的職業もあります。典型的なのは床屋、次に鍛冶屋です。

鍛冶屋はいわゆる野鍛冶で農具を扱っています。また、場合によっては什器、食器類を扱います。もちろん新品を作ることもありますが、仕事として多いのは修理です。普段もちこまれば、その場では金を取らずに修理をしてあげる。そして、収穫期の季節払いの形で年2回穀物などの現物で支払いを受ける、そういう形が伝統的でしたが、このごろでは、現金のその都度払いという形も多くなっています。

それから、これは儀礼好きな民族であるかどうかで違ってきますが、ネワール社会やミティラー社会など、儀礼ごとが多いところだと、それに必要な仕事をするカーストの役割はなかなかなくなりません。しかも宗教儀礼にまつわることで、人々は生活の他の側面に比べて保守的になるということもあり、カースト的な他の仕事はなくなっても儀礼的な役割分担は続いているということがよく見られます。

儀礼的なものでは、たとえばミティラーをはじめタライでは、北インド系ヒンドゥー教徒のカーストでマリーーという花売りカーストがいます。これは儀礼の際に花で神様などを飾りたてるために必要なカーストです。それからクムハールという壺作りカーストも儀礼時に必要とされます。成人式とか結婚式とかの人生儀礼は、神ごとを伴いますので、使い古しでない新しい壺や器がいます。その素焼きの壺などを作ってもっていく、土器作りの職人がこのカーストから出ます。それから先ほど床屋もあげましたが、床屋は儀礼の時に体を清めるためになくしてはならないカーストです。髪を切り、場合によっては頭をツルツルに剃り、爪も切る。爪を切ることも体の清めにとっては重要です。儀礼を始める前に体を清浄にして、それから神ごとを行う、そのために床屋さんは不可欠です。一方鍛冶屋は儀礼的な面にあまり関わりがありません。世俗的な、農業や台所仕事などの実用面では重要なのですが、ここで扱っている3社会を通じてあまり儀礼的ではありません。

着るものを作る仕立屋、これもどこでも必要なカーストですが、かれらの場合、儀礼面と世俗面の両方に関わっていることが多いようです。ただその儀礼的な仕事は、仕立ての仕事とは全然異なっていて、山地ヒンドゥーやネワールでは音楽演奏の仕事です。音楽も儀礼ではとても重要です。仕立ての仕事がなくなっても、仕立屋カーストの儀礼的音楽演奏の役割が残るということもあります。以前には、楽師が村の触れ役を兼ねていて、なにか行事があると太鼓などを叩いてふれて回るということも山地ではありました。ただこれは通信手段の発達や行政機構の改革などで、見られなくなってきました。

汚物の片づけや掃除も必要不可欠な仕事ですが、儀礼でも片づけをするカーストが要る場合があります。皆が捧げものを捧げて汚くなったり一杯になった後を始末し、場合によっては自分でその捧げものを食べるというカーストもあります。

ミティラーの葬式では、ブラーマンの中で葬式の時の司祭というのが死者の使った物や死者の家族が与える贈り物などをもらっていきます。それによって死の不吉が移譲され、家族は不吉から逃れる事ができ、ブラーマンの方はそれを自分に引き受ける。だから葬式のブラーマンはそんなに高くないといわれます。

7.3. カーストと職業の不一致、カースト間格差

カースト固有の職業といっても、そのカーストの中に別の仕事をする人がいるのは、むしろ普通のことです。たとえば山地ヒンドゥーのカミは鍛冶屋カーストといわれますが、全部のカミの人が鍛冶屋であるわけではなく、農業世帯もあります。それは他の多くのカーストでもそうで、カースト社会では普通の現象です。カースト的職業以外の職業に携わっている人が結構多いわけです。それではカースト的職業はどう考えるか。床屋カーストの人がみな床屋の仕事をしているわけではないけれど、床屋カースト以外は床屋の仕事はしないものだ。カーストと職業の関係はそんな風にいえると思います。

当然ながら、カーストというのは一枚岩ではありません。中に職業のちがいがあれば貧富の差もあります。ただ、それを意識した上で、全体としてカースト間を比べると、やはりその間に格差は存在するといわざるを得ません。たとえば、つい最近ミティラーのG村に電気が導入されました。(山地のB村はまだです。)電気導入時から今までの状態を見てみると、やはりもっともカースト的地位が低いカーストの家々には、貧しくて電気が引けない例が非常に多く、低いカーストは恵まれていないという点がはっきりみられます。いろいろ他の面で統計をとっても、そういう傾向はあるといえます。カースト間の経済や政治力の面での格差に関しては、いろいろ議論があるのですが、高いカーストは恵まれていて、低いカーストは恵まれていない、ということは大雑把にはいえるのではないかと考えています。そうはいっても、最高位のブラーマンを例外扱いする必要もでてきたり、またカースト内格差が大きいケースもあり、すっかり割り切れるわけではありません。

カーストと政治的まとまりの話にも似たようなところはあって、カーストごとにまとまって対立しているようにみえても、中には反主流派で、他のカーストのグループの方についたりする部分が見られたりします。後の話の中では、「カースト対立」といったような表現も使いますが、それは単純化したい方で、実際にはもっと細かい人間関係も含まれるのが普通です。

そうはいっても、以前は今より、カーストと職業の相関関係は高かったと考えられますし、また、社会的配置や行動に関しても、カーストの観点からみると分かるということが多かったと思います。いいかえれば、今日、カースト的な事柄には衰退の方向等、いろいろな変化が出てきています。

7.4. 農業労働者とカースト

カーストとの相関の点では微妙なところがありますが、南アジア社会においては(ネワール、山地ヒンドゥー、ミティラー社会を含め)インドでも、農業経営を、土地所有者が農業労働者を使って行うという形態がよくみられます。小作に任せるよりも、いわゆる作男を雇ってやらせるケースです。これには、1年とかもっと長い期間契約する場合がありますが、日雇い農業労働者を雇うことも少なくありません。

ネワールの場合には、このような農業労働者以前の伝統的な形として共同労働がありました。

日本でいう「ゆい」に当たるもので、親族を中心とし、他の人も集めてグループを作る。またはグループを作らないまでも適宜に労働力を交換する。そういう共同労働「ボラ」がありました。それがどんどんなくなって農業労働者に置きかえられています。ネワール以外の農業労働者が外部からやってくるようになったのですが、その人々に金を払って農業労働をさせるわけです。その方が農期を逃がさずに済みますし、また、ネワールの農家では、農業労働を自分ではやらないで、勤めや現金稼ぎのために都市に出る人も増えているのです。

山地ヒンドゥーの場合にも、私の調べた B 村では、農業労働者が外から流入し、その人々を使って農業をやる例がみられました。マガルとかチェパンとかいう人たちが山の上の方からやって来るのですが、村の人はかれらを一定期間住ませて農業労働をさせています。

B 村では、鍛冶屋カースト(カミ)も農業労働をやっていました。下のカーストがカースト的な職業に携わりながら、土地持ちカーストの人の土地で農業労働をやるという形、つまりカーストの仕事と並行して農業労働を行うというケースはカースト社会には結構みられます。そこでは、カースト的關係が農業の雇用関係にも及んでいるといえます。その場合、カーストの仕事(たとえば鍛冶)の報酬が現金払いになって、土地持ちカーストの主人との個別的な関係が切れて、そこにまつわる他の関係もなくなってしまうケースがあります。B 村では、カミの若い職人が新しい技術を覚え、現金払いを要求し、それが収入増加とともに従来のカースト間の個別的関係の解消につながり、カミの日雇い農業労働の例が減り、かわりに山の上の方の人が農業労働に使われています。農業労働とカーストの仕事とは連関しながら変っているのです。

一方、タライの村では、農業労働がまだタトマーなどの低いカーストによって行われています。これも、南アジアに広くみられることですが、小作保護法が制定されるに従って、従来の小作人に土地が渡るのを恐れた地主が土地を取り戻し、農業労働者を使って自前で経営するという方向があります。タライの G 村でも、やはり小作関係の減少と、農業労働者の雇用の増大という傾向がみられるのです。

G 村では、それに加えて、出稼ぎの形で農業労働に出る人もいます。中には、近年、農業面で発展したパンジャブやハリヤナなどまでいく例もみられます。もちろん交通の発達はそのを促す要因のひとつですが、G 村はインドと一衣帯水のところにあり、インドに出ていくのも、ネパールの他の地域に行くのも変わらないと考えられていることが分かります。デリーその他に出ている村人の中には、もう少し良い教育を受けて工場勤めやホワイトカラーの仕事をしている人もいます。

出稼ぎにもカースト差はみられます。リキシャ引きはその例で、低いカーストに限られますが、その中には、G 村から近くのジャナクプルの町に通っている人のほか、アッサムのゴーハティまで行っている人も結構みられます。この種の仕事は、別にカースト固有の職業ではありませんが、ブラーマンやカーヤスタといった高位カーストの人の就業例は全く見られません。

8. カースト的慣行の変化と変異

8.1. カースト的職業の変化

都市を中心に、学校関係その他の公的な仕事、会社や工場づとめ、旅行のガイド等々、従来なかった職業がいろいろでいていますが、そういう仕事にはほとんどカーストの区別は関わっていません。むしろ問題になるのは教育です。教育を受けて、親とはちがった、より有利な仕事に携わるようになる人は珍しくありません。ただもちろん教育をうけられるかどうかは、家族の経済状態にかかわるわけで、その経済状態とカーストが無関係といい切れないには先ほど述べたとおりです。

織物とか酒造りとかいろいろな仕事も、カースト固有のものではなくっていく傾向があります。洋裁というのは、仕立屋の仕事のようにみえるのですが、様々なカーストの人がやって構わず、カースト的な仕事ではないとされています。既製服が入ってきてそれを売る、それも従来のカースト固有の仕事ではありません。農業は微妙で、農民カーストというのもあるのですが、多くのカーストの人がやっています。大工やレンガ積み工なども、建築需要が増え、他のカーストの人が参入して、特定のカーストに限られなくなる、そういう面も見られます。

仕事のやり方が新しくなっても、カーストと職業の対応関係が色濃く残るという仕事もあります。それはたとえば掃除人の仕事です。町などの地方自治体が清掃の仕事に金を出す形になっても、それを実際にやるのは下のカーストであるという状況が依然として見られます。その場合、給料をもらいながら従来の仕事に似たような仕事をやっています。雇用関係は新しいし、支払い形態も今日的だけれども、仕事をしているカーストの種類は同じです。こういう場合にはカーストがなくなっているとはいいいくいとします。

従来のカースト的な仕事の関係というのは、大体世襲的に引き継がれていて、たとえば同じ床屋は同じ一族の人々に対して仕事をし、支払いは定期、現物払いでしたが。そういう雇用・支払い形態はどんどん崩れて、現金払いになり、世襲的な関係も弱まる、という傾向がみられます。しかし、雇用者と被雇用者の世襲的な関係は切れても、仕事をする側はずっと同じ仕事をし続けるということもあるのです。

なお、報酬形態でも、儀礼が関わっていると、現物払いも結構残ります。だから、鍛冶屋には現金払いだが、床屋には現物払いというケースもみられます。儀礼ごとの場合は単純な支払いとは異なる観念もつきまとうわけで、支払いその他の関係に保守性がみられます。

ただ、儀礼が関わっていても全く変化がないわけではありません。たとえばネワールのS村では、1960年代から古い土地制度が廃止されて自作農が増え、また緑の革命による農業収入の増加や、村外雇用の増大で、農民カースト(ジャブ)が力を蓄え、従来村を牛耳っていたシェショと張り合うという事態が起きました。その引き金となったのは選挙制度です。選挙では人口がものをいいますが、この村ではジャブの方が人口が多く、従来、シェショの天下だった状態を脅かしています。それで村の主要な2つのカースト間で暴力沙汰にまでなる対立が起こり、

その中でジャブの人々が、従来、シェショに従属してやっていた役割を放棄するという事態が起きました。具体的には、村祭りの時の音楽演奏をやめてしまうわけです。たかが音楽演奏と思われるかもしれませんが、信心深い村人にとっては、祭りが完全な形で行われないのは大問題で、かなり長い間、両カーストの対立状態が続きました。これは、政治、社会、経済変化が、儀礼面での変化も引き起こした例です。ただ、この対立も最近はあまり問題にされなくなりました。そこには1990年の民主化の影響というのものもあるようですが、ここではこの話への深入りは避けようと思います。

8.2. 文化、環境のちがい / 二重行動

変化にはまた、文化、環境のちがいも関わっています。たとえば山のブラーマンは多くの種類の動物の肉を食べてはいけません。ヤギ、魚などはいいけれど、ニワトリや水牛の肉はだめで、もちろん、牛や豚は食べられない。そんな人がカトマンズ盆地に来ると、カトマンズのネワールの人々の間では、家畜飼育の比率が低く、乳製品の利用程度が非常に低いので、タンパク補給源に窮するという状態になります。カトマンズ盆地では、人口が増えていて、牛乳もなかなか買えません。この頃は政府の政策で、他の所から牛乳を持ってきましたが、それでも足りない。そうすると仕方がないから、それまではカースト規制を守って食べなかった肉を、ブラーマンが食べたりすることが起こります。

そこには、都市での生活だから、それから、親や親戚から離れているから、従来の慣習からはずれても何とかなるという考え方も影響しています。そういう人が故郷の山地に帰った時に、新しい生活様式や観念が持ちかえられるということがあります。でも町で大丈夫だったことが村でストレートに通じるわけではありません。そこで、行動の使い分けも起こります。私は町ではこういうものを食べているけれども、村へ帰って親の前ではそんなことはしない。親の前でそんなことをしたら、家の外で自分で料理をして食べろといわれる、と説明してくれる人もいます。そういう人は村へ帰ったらそちらの顔をして菜食主義を通すという使い分けをするわけです。そんな二重行動もみられるようになっています。

8.3. カースト名称の変更：カースト上昇の方向

ネパールに行った方でカトマンズ盆地外に出て、カトマンズ盆地以外のネワールの人と話をした方は分かるでしょうが、盆地の外のネワールの人は大抵自分のことを「シュレスタ」といいます。これはもとはサンスクリット語で、ネワール語では「シェショ」の尊称であり、またネパール語の中でも使われます。この名前を、外へ移住していったネワールの人々が自分のカースト名としてよく使っているのです。中・下位のカーストの人々が、自分の出身を誰も知らない移住先で、高いカーストの名前を自分につけるわけです。それで、盆地外に出たらネワールは皆シュレスタになる、ということがネパールで一般的にかなり知られるようになっていきます。そうすると、「シュレスタ」といった場合に、額面どおり受け入れられないというケー

スも出てきます。高いカーストに同化したいという願望や行動がすぐに成功するわけでもありませんが、もとのカーストが何であるかは人には分からず、なにしろみなシュレスタといっている、という状態がでてくるわけです。

ところで、カトマンズ盆地の外の地域のバザールなどには、様々な民族/カースト(「ジャート」)が住んでいます。その中でネワールはみな「シュレスタ」で、ネワールの中のカースト差は捨象されてしまいます。ネワールは、ネワール以外の人々からはひとつのジャート扱いされる傾向があるのですが、外ではそれが「シュレスタ化」の面からさらに促進されることになります。

山地ヒンドゥーの場合には、先ほど言いましたように、カーストの種類が少なく、それが他民族のカースト化を招いて、それが統治政策と繋がっていました。権力が様々なジャートを位置づけたわけですから、ネワールと異なって、一括して「パルパテ(「山地の(人)」)」とか、「パルパテ・ヒンドゥー」とかと呼ばれることはそんなに多くはありません。むしろ個々のカースト名で呼ばれることの方が多いのです。これはミティラーの諸カーストの場合でも同様で、カースト社会といっても3社会の間に変異がみられるのです。

なお、「シュレスタ化」に似た現象は、山地ヒンドゥーの場合にもあったと思われますが、あったとしても大分前に起こった話で、実際に確かめるのはなかなか難しいことです。カースト上昇論ではシュリニヴァスの唱えたサンスクリット化が有名ですが、上のカースト名称変更のプロセスも広義のサンスクリット化に入れられると思います。

9. インドとネパールの相異：カースト団体の欠如など

カーストに関わる地域的な変異に関連して、ここでちょっとインドとネパールの相違をみてみます。おそらく一番大きな相異は、ネパールがムスリム支配やイギリス植民地支配をほとんど経験しなかった点だと思います。そこにカースト社会が残っていますので、むしろムスリム支配やイギリス植民地等で歪められていないカースト・システムがみられるのではないかと思います。もちろん、ネパールが南アジアの周辺地域に位置するという面での変異も考慮する必要があります。パルパテ・ヒンドゥーの中間諸カーストの欠如や、チベット・ビルマ語系の言葉を話すネワールの間にカースト・システムが存在することなどはその一環です。それらを念頭においた上で比較を行うのは有益なことだと思います。また、この面からは、ネパール側のミティラー社会は、異文化をもつ上位権力の支配の影響の少ない、しかも典型的なカースト社会と考えられるかもしれません。

相異の面では、インドで非常に大きな政治問題となっているコミュニズムが、ネパールではほとんどみられないという点もあげられます。少なくとも、現在のインドで、ヒンドゥー対ムスリムの対立を「コミュニズム」とよんでいる、その意味での対立をネパールは経験していないといえます。もともとネパールにはムスリム人口は少なく、それほど力をもっていませんし、今いいましたように、ムスリム権力を頂いたこともありませんでした。ネパールに全

くムスリムがいないわけではないのですが、ムスリム(ムサルマン)は、ひとつのジャートとして、他の様々な民族と同様に扱われ、全体でひとつの大きな政治的まとまりをみせるという方向はみてとれません。ヒンドゥーがひとつにまとまる、あるいはまとまりの方向性をとるということもなく、その点ではインドとは大きく異なります。

他の相違点として、留保制度があります。インドでは低いカーストに対する政治、経済、教育面での優遇措置として留保(リザーベーション)制度が導入されています。低いカーストの人々に一定割合の議席や、官職や学校の入学定員を確保しておく制度で、それをめぐる駆け引きがいろいろ行われています。留保枠を受けるために、自分は低いカーストだと名乗る逆の傾向も出てきます。高いカーストの人は割り当てをもらえないので、かれらにとっては大学の門や就職口がより狭くなったりもします。この留保制度には、名前を持ったグループ(カースト/民族/トライブ)の存在が大きく関わっていますが、制度の存在がそういうグループの存続あるいは再編成を促しているという面もあるといえます。

こういう留保制度というものがネパールにはありません。作ったらという声もでていますが、なぜあえてインドと同じことをするのかという反対もあり、導入されていません。そこから生ずる権益をめぐる駆け引き、あるいはグループ帰属の揺れなどはないわけです。

権益という点でいえば、インドではずいぶん前から「カースト団体」の存在が注目されてきました。特定カーストが選挙母体になったり、会社や銀行を作るときにまとまったり、雑誌を出したりというように、いろいろな面で同じカーストの人々がまとまった組織が、近代的な機能を担って形成されてきたのです。その「カースト団体」はインドでは、従来のカーストの範囲より大きなものとして組織される傾向があります。ネパールの場合は、大きな企業や団体ができる経済的条件が欠けていて、また、地域間の交通も不自由で、なかなかまとまらない面があります。しかも 1990 年以前には政党が禁止されていて、政治的なグループは作りにくく、結局、どの面でも、インドのようなカースト団体形成の条件が欠如していたわけです。

こんな具合に、近代インドでカースト・宗教や社会に関わり、大きな影響を与えているいくつかの事象が、ネパールではみられないわけですが、ここであげたものは、ネパールが周辺社会だから欠如しているというようなものではないと思います。むしろこれらは、インドにおける特殊的展開といった方が良いのではないのでしょうか。その面ではネパールには、カースト・システムのいわば攪乱要因が少ないといえるかもしれません。

なお繰り返しになりますが、ネパールの政治権力がチベット・ビルマ語系などのいろいろな民族を真ん中の地位に組み込んだというのは、やはりネパールの非常にユニークなところだと思います。

10. カーストシステムは変化しているか

最後になりますが、カースト・システムというのは変化しているのかどうか。これに関しては、変わっているという考え方、いないという考え方など様々な説があります。カースト・シ

システムの重要な柱である分業がなくなっているから、システムは本質的に変質している、という解釈。分業はなくなっても、カースト間の上下関係はみられるからカーストは存続しているという説。カースト序列や分業がゆるんでも、カースト内部の親族的つながりは続いているのでカーストはなくなっていない、という考え方。現実もさることながら理論も複雑です。

たとえば、カーストはなくなっていないという考え方も、ある面ではなるほどというところがあります。先ほど、インドではカースト団体が注目されてきたといいましたが、その場合、カーストが拡大しているといういい方もなされます。しかし、カースト団体を論じる場合、複数のカースト間の分業の網の目というのは、ほとんど問題にされません。変化して分業が無くなって各々分離したカーストがあつて、その個々のカーストが政治的あるいは経済的に(場合によっては)広くまとまる。それでカーストは存続、拡大している、といわれるわけです。でもそれは、カースト・システムの存続なのだろうか。そこは私には疑問に思われます。微妙なのは、以前から続いている「カースト」というカテゴリーが拡大しているようにみえることです。でもそれはカーストと呼ぶのに値するのだろうか。解釈の分かれるところですが、わたしは、カースト間関係がもし全然なかったらもうそれはカーストと呼ばない方がいいだろうと思っています。

今まで、大体ネワールの村を中心に、山地ヒンドゥーおよびミティラーの村の話も混じえ、最後にはインドにもちょっと目を向けて、カースト慣行などについてお話ししたわけですが、類似点とともに相異点もいろいろあるわけです。カースト社会といっても一筋縄ではいかないわけで、それに近年の変化が関わりますから、相当複雑です。例を出して説明しましたように、日本とすごく考え方が違う側面もあり、また部分的に似ている面もあります。いずれにせよ異文化理解の良い例になることを指摘して今日のお話を終わりにしたいと思います。